

令和元年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

岐阜県立海津特別支援学校

学校番号

111

自己評価

学校教育目標	<p>児童生徒がもつ可能性を最大限に伸ばすことができるように</p> <p>(1) 児童生徒一人一人の障がいの状況や、発達段階等に応じたきめ細かい教育を行う。</p> <p>(2) 仲間と共にとくましく、明るく生きる力を育む。</p> <p>(3) 一人一人が社会自立に必要な基礎的・基本的な知識・技能を培う。</p>
評価する領域・分野	◇「自立」に向けた力を育成するための指導・支援の在り方
現状及びアンケートの結果分析等	<p>上記の領域・分野は、全校の研究テーマで、継続して全校で実践研究を進めているところである。</p> <p>昨年度の学校評価において、教職員に関する保護者等を対象とするアンケート項目では、「学校の先生は、児童生徒の実態を的確に捉えている。」「学校の先生は、専門的知識が豊かで教師としての資質を身に付けている。」について「よくあてはまる」と「ややあてはまる」の合計が70%台、また、「実態を的確にとらえている」に関しては「あまりあてはまらない」が11%となり、この3年間で評価が一番低くなった。授業に関する項目でも「授業内容や進度が実態に即している。」「一人一人に合った教材教具が準備されている。」に対して「わからない」が15%以上で高くなった。これは教員の専門性について不満を感じているということである。今年度は授業デザインを大切にして、特に支援環境に焦点をあて、職員が話し合う場を多く設定できるように学校全体で工夫している。このことが職員の専門性の向上につながり、そして保護者にも伝わるようにしていきたい。</p>
今年度の具体的かつ明確な重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ・自立に向けた力を育成するための指導・支援を工夫する。 ・児童生徒の実態からねらいを明確にし、部内又は部を超えた指導・支援の実践交流を積み重ね、各部での取組を確認し、授業づくりに反映させることで児童生徒の自立に向けた力を育む。
重点目標を達成するための校内組織体制	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの研究で得られた成果を他の教科、領域に広げられるように各学部で焦点を当てる教科・領域を決めて進める。 ・部別において、事後研究会を行い、授業ポイントの有効性について検証し、部内での再確認と共通理解を図る。 ・各部で細案による研究授業を行い、授業実践を全校職員で参観し、小グループ討議を通して評価を行い、授業改善を行っていく。
目標の達成に必要な具体的取組	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度の成果と課題をもとに、授業関係者全員でアイデアを出し合い、KJ法等でまとめながら単元計画を立てる。(TTによる授業デザイン) ・昨年度までの研究で確認した授業のポイントを参考に、支援環境に焦点を当てて話し合う。特に今年度は「教師の働きかけ」について、支援方法を具現化していく。 ・小学部では「体育」、中学部では「生活単元学習」、高等部では「作業学習」を研究の場として取り組む。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の満足度や充実感の把握 ・保護者からの意見・感想 ・学校評議員等からの意見 ・部内・校内における授業の教員相互の事後評価 ・令和元年度年間指導計画案、単元計画一覧表案の完成

取組状況・実践内容等	<ul style="list-style-type: none"> ・どの学部も単元等の初めに授業デザインを行い、ねらいや指導・支援等について、関わる職員間で共通理解して進めた。 ・7月に中学部、9月に小学部、11月に高等部がそれぞれ公開授業を行い、付箋を用いた小グループ討議を通じて、全校職員で評価を行った。また、児童生徒の実態に応じたねらいになっているか、ねらいに迫る支援環境が整っているかなどを検討し、具体的な改善策を考え、出た意見を共有した。 ・改善策を意識した授業を再度公開すると共に、授業を参観することができなかった職員にもスライド等を用いて授業改善の全学部の取組について説明した。
評価の視点	評価
<ul style="list-style-type: none"> ① 授業デザインを通して、授業にかかわる職員間でねらいや指導・支援について共通理解して授業を進めることができたか。 ② 部別研究会を通して各部で効果的な支援環境について整理し、人的支援、特に「教師の働きかけ」を意識した授業づくりができ、児童生徒の主体的に動く姿につながったか。 ③ 全校研究会では、各部の授業を参観し、学部を超えて改善策等について検討することで、縦のつながりを意識し、学校全体として「自立」に向けた支援について考えることができたか。 	<p>A ② C D</p> <p>① B C D</p> <p>A ② C D</p>
成果・課題	総合評価
<ul style="list-style-type: none"> ○授業デザインの中で、児童生徒にかかわる職員で実態を改めて見直し、個々のねらいを明確にでき、ねらいに迫る授業を行うことができた。 ○支援環境の中でも「教師の働きかけ」に注目することで、適切な支援を行うための教師の人数や配置を見直したり、場面ごとに教師の支援の方法(身体介護、見本の提示授業者側は気付かなかった支援環境)や配慮について意見交換したりすることができ、次の実践につながった。 ●教師の支援については、必要な支援ができていないかと同時に、過剰な支援になっていないかを見極め、その都度改善していくことがまだまだ必要である。 ●児童生徒が更に主体的に活動できるように、分かりやすい環境づくりや個々に合わせた支援ツール等を工夫し、教師の直接的な支援が減る授業づくりを行っていく必要がある。 	A ② C D
来年度に向けての改善方策案	<ul style="list-style-type: none"> ・研究に取り組む中で各部において有効だった支援環境を、授業実践を積み重ねながら確認していく。分かりやすい環境づくりや一人一人に即した支援ツールの活用が当たり前になるようにしていく。 ・授業を行いながら、児童生徒にとって必要な支援が行われているかを確認し、過剰な支援になっていないかを見極め、適切な支援とは何かを振り返り評価しながら、授業改善を行う。

学校関係者評価 (令和2年2月6日実施)

<p>意見・要望・評価等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今年度10月にまとめた学校評価においては、保護者と評議員からいただいたアンケート結果から、今年度「学校の授業内容や進度は、児童生徒の実態に即している。」という項目において昨年度よりも評価が12ポイント上がったこと、「学校の先生は児童生徒の実態を的確にとらえている。」や「授業は児童生徒一人一人に合った教材教具が準備されている。」の項目についてもこれまでで一番良い評価となった。先生方が研究を通して教師間で共通理解を図りながら授業改善に努めてきたことが反映されている。 ・学校のこれらの取組について、より保護者・地域に知っていただくようにしたい。(通信など)
